

小田原史談

第 129 号
発行所 小田原史談会
小田原市南町 2-3-21

遺稿

伊勢者先生

中野敬次郎

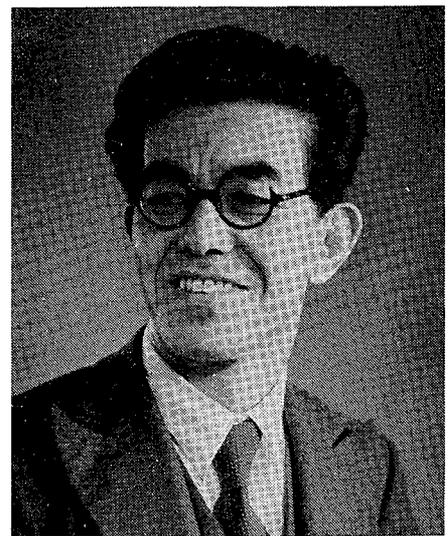


私は三重県伊勢市一字田
町というところに生まれた。
しかし、小田原に来てから
六十年になる。現住所は小
田原市にあるが本籍は今も
伊勢市にある。伊勢者とい
うのを誇りと思っているか
らである。
大学（神宮皇学館）今の

皇学館大学）を卒業して京
都にいい就職がきまってい
たが、卒業式の前日に西洋
史の森田という主任教授に
呼び出されて、神奈川県
立小田原中学校の教師と
して行ってこれと突然依頼
されてしまった。森田教授
は私を特別に目をかけてく
るが一度も町に降りたこと
もない。小さなトタン屋根
（関東大震災の数年後だか
ら）の家が並んでいる町で
私には好かん町だから行く
のはいやだと何回もことわ
つたのだが、主任教師は仲々
私の言うことをきいてくれ
なかつたのである。
結局生家に戻って母に相
談してきめることにした。
私の母は九十六歳まで生き
て大家族の中野家を一手に
仕切った女丈夫で、その頃
はまだ大元気のときであつ
たから、その話を相談した
ら「このアホー奴」と一言
のもとに奴鳴られてしまつ
た。小田原などに行くでは
ない。森田先生が何んと仰
言つても、小田原などへ行
てはならぬと母は言うので
ある。

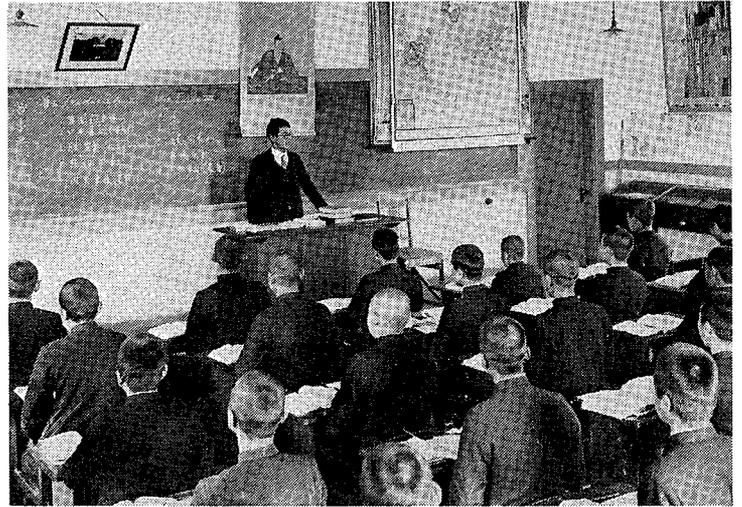
新卒者を小田原へ
送ってくれ、是非た
のむと依頼をうけた
から行け」という。
私は京都の方に就
職がきまつたからと
小田原は辞退した。
小田原は東京に所用
で行くときに駅は見

故中野敬次郎先生 追悼号



り柱があつて、使用すると
きは、その張り柱できち
んと張られて、走つても振
りまわしても動かんように
できておる。小田原提灯に
は張り柱がないから、いつ
もぶらりぶらりしている。
あんな骨無し提灯を作つて
「小田原提灯でござる」な
どと自慢にしているような
所の男達は骨抜きばかりが
住んでいるのであろう。ま
た、小田原評定ということ
も知っているのであろうが、
太閤秀吉さんが大軍で小田
原を征伐したとき、小田原
の北条氏は毎日城中で大会
議をくりかえして、籠
城しようか、出撃しようか
と議論して決論がつかず、
牛のよだれのようにだらだ
ら会議を来る日も来る日も
やっているうちに、太閤さ
んの大軍が一気に押し寄せ
て来て、小田原城を攻め落
してしまつたのですよ。だ
らだらといつまでもする
のを小田原評定というので
すよ。そんなだらしない
人々の沢山住んでいると
ころに大切な息子はやれま
せん。」私の母は十六歳か
ら子を生み出して、三十八
歳までに女ばかり八人生み、
四十二歳で男の子、私を生
んだ。沢山子は生んでも男
は最後の一人「そんな大切
な息子を小田原なんぞにや
れるものか」というのが母
の持論であつた。恩師の先
生は是非行つてくれという。
母は絶対行くなという。困
っている私の母のところを主
任教授がわざわざこられて、
両方の意見の中をとり、小
田原中学校へ三年間先生と
して赴任する。三年したら
小田原の職を辞して伊勢の
母の許に帰り、名古屋でも

西洋史でプロシアの勃興を講義する中野先生



ころに来てしまったなあと思つた。
しかし、そのうちに私は、小田原の町も小田原中学もすきになつてしまつたのである。

伊勢者は郷里を出ると必ず成功すると言われる。昔伊勢商人の成功の基本「伊勢っ子正直」と「伊勢こじき」にあると言われた。伊勢者は正直者で、商賈するにも決して掛値売りして一攫千金を得るといふ商法はせず、恰も「こじき」の一銭、二銭と小金を積んで行くように「薄利多売」「積少為大」の精神と商法で行くのである。

もう一つ伊勢者の道徳には報恩の精神が強いのである。
私は小田原には三年いて故郷に帰るつもりでいたが、少くとも三年間小田原市に厄介になる以上は、必ず三年間の恩返しをしてから小田原を去らなければならぬと思つた。

私は商人でないし、金もうけも出来ない職業だから、何んで三年間の恩返しをして小田原を去って行くかかと考えた。

小田原は歴史の古い町で、小田原城、一夜城、大森氏、北条氏、大久保氏など他に誇るべき立派な史蹟を多数持ち、数多き材料を沢山持っ

ていて、大いにそれを誇つているが、その誇るべきものを誇るだけで一向研究しようと思はない。これではいけないと思つた。そこで私は、この三年間に小田原城と石垣城その他を専心研究してこれを世に出したいと思つた。

私が小田原中学の先生をしながら、郷土史研究に力を入れた理由はここにあつた。
そしてそれが病みつきのなつた私は遂に生れ郷土に帰らぬ人となつてしまつたのである。三年どころか、その二十倍小田原に住んだ。

私は暇を見て故郷に旅行して、母の墓参をする度に、必ず墓前にぬかづいて不孝をわびるのである。
母は生前に、今年が故郷に必ず返れ、来年はきつと返れと待つていたが、「そのうちに必ず返ります。」と言いつつ遂に帰らなかつた。そして一介の小田原中学の田舎教師として終つてしまつた。

「積少為大」の人間は早く成功しない。成功が永くかかる。伊勢者は大器晩生だ。私もまだまだ元気で仕事をし行かねばならないのである。

（説明）
この遺稿は、小田原中学校第三十三回卒業生が「卒業五十周年記念誌」を刊行するに当り、先生が求めに依つて執筆されたものである。記念誌は、まだ刊行されていないが、記念誌編集委員会の好意により、それに先立って、本会報に掲載することを得たものである。
（岡部忠夫）

私には母を見て故郷に旅行して、母の墓参をする度に、必ず墓前にぬかづいて不孝をわびるのである。
母は生前に、今年が故郷に必ず返れ、来年はきつと返れと待つていたが、「そのうちに必ず返ります。」と言いつつ遂に帰らなかつた。そして一介の小田原中学の田舎教師として終つてしまつた。

大阪でも、京都でも母の希望するところに就職するという話し合で、やっとけりが付いて、忘れもしないが、大正十五年の春三月、二十冊許りの風呂敷包の本を片手にさげて、初めて見る熱海線小田原駅の表に降り立った。桜は咲いていたが寒い朝だつた。

丸のお堀端を通り、小峰の方に向つたが、お濠端の桜は今のよう奇麗でなく見物人がちらほら歩いてた。途中の道路ぞいの家は、みなトタン屋根の小さい家ばかりで、朝の早いせいもあるが、町が寒々としていた。

今の小田原競輪場のところが草ぼうぼうの広場であつた。八幡山の小田原中学の玄関にやつと到着したとき、校舎は震災後のバラック（新校舎は翌年建つた）であつたから、一瞬えらいと



史談会初詣（昭六一・一・十二）

昭六十一年秋

故 中野敬次郎先生略歴

出生地 三重県伊勢市一宇田町792番地
 明治36年5月8日生
 昭和62年3月12日没 享年83歳

大正11年3月7日 三重県立宇治山田中学校卒業
 15年3月10日 神宮皇学館（現皇学館大学）本科（4年制）
 卒業
 在学中、神道学、漢文学、国語学、歴史学を専攻

=職歴=

大正15年3月～5月 神奈川県立小田原中学校教授嘱託
 大正15年5月～昭和23年3月 神奈川県立小田原中学校教諭
 昭和23年4月～28年3月 神奈川県立小田原高等学校（学制改革により校名変更）教諭
 28年4月～41年3月 小田原市教育委員会社会教育課長
 28年5月～29年11月 小田原市中央公民館長兼任
 31年1月～41年3月 小田原市立郷土文化館館長並びに小田原市立文武館館長兼任
 38年10月～41年3月 小田原市立体育館館長兼任
 41年3月 小田原市社会教育課長辞任
 41年4月～57年3月 新名学園旭丘高等学校講師
 54年4月～58年3月 小田原予備校講師

=団体役職=

昭和17年12月 軍事保護院講師嘱託
 18年3月 神奈川県史跡名勝天然記念物調査委員
 18年6月 日本傷疾軍人会講師嘱託
 30年7月 小田原史談会発足と共に副会長に就任（当初会長は小田原市長）
 30年～35年 尊徳記念館建設期成会事務次長（寄附金募集、記念館敷地買収、記念館設計などの一切に関与、特に生家跡地の取得と移転復元、尊徳遺品輯集に最も努力）
 35年6月 小田原城天守閣運営委員（建設以前、天守閣促進運動の中心となり奔走。建設の際＝昭和33～35＝は、工事、設計、考証、祝曲に至るまでの一切の関与の委嘱を受け、心魂を傾けた）
 36年12月 天守閣管理事務局嘱託
 39年7月～62年3月 神奈川県箱根町誌編集委員
 44年1月 小田原市文化財保護委員
 44年4月 『神奈川県史』人物執筆員
 44年4月～48年3月 小田原史談会会長（第1期）

44年4月～62年3月 小田原文化団体連絡協議会会長（発足と共に会長就任）
 44年5月～62年3月 神奈川県文化連盟理事
 47年8月～62年3月 神奈川県文化資料館運営委員
 48年5月～59年6月 小田原民俗芸能協会会長（発足と共に会長就任）
 55年4月～62年3月 小田原史談会会長（第2期）
 57年4月～62年3月 小田原茶道連盟会長
 58年7月～62年3月 小田原市文化財保護委員長

=主な表彰=

昭和15年6月 神奈川県知事表彰（観光事業に尽瘁した功績）
 33年3月 日本放送協会会長感謝状（多年放送事業に寄与した顕著な功績）
 33年4月 ポーイスカウト神奈川連合会会長感謝状（ポーイスカウト運動に貢献）
 36年3月 神奈川県教育委員会表彰（文化財保護功労）
 36年11月 “（多年教育振興につくした功労）
 40年1月 講道館館長感謝状（地域柔道振興に尽力）
 43年10月 神奈川県知事表彰（郷土史研究と郷土文化継承発展の功労）
 45年10月 神奈川県教育委員会表彰（社会教育振興につくした功労）
 47年10月 文部大臣表彰（多年教育のために尽した功績）
 48年4月 神奈川県知事表彰（社会教育の発展と文化財の保護研究につくした功労）
 53年1月 小田原市褒賞基金条例に基づく表彰（多年文化財保につくした業績）
 58年9月 小田原市長感謝状（多年文化団体連合会会長として文化向上につくした業績）
 58年11月 文部大臣表彰（文化財保護と地方文化振興功労）
 61年11月 神奈川文化賞（文化財保護及び郷土史の研究に尽力）
 その他表彰、感謝状多数

=主な著書=

『箱根と伊豆』（山と溪谷社）『丹沢山の歴史』（全国林業改良普及会）『箱根物産の歴史』（小田原）『二宮金次郎（弘学社）『日本文化を築いた十偉人』（毎日新聞社）『小田原近代百年史』（形成社）同復刻本（国書刊行会）『曾我兄弟』（名著出版）『小田原市資料歴史編』（小田原市）『写真集小田原箱根』（国書刊行会）その他、共著のほか、新聞、雑誌、刊行物に執筆したものが多数

長い間史談会のことでも先生にご厄介になりました。中野先生の御逝去にはほんとは驚きました。先生ばかりに頼って居りました私等は、目の前が暗くなった感じが致します。今になって如何に先生の偉大であったかつくづくと思ひ返されま

す。

先生の功績……文化団体連絡協議会長を初め、郷土文化館、尊徳記念館、小田原天守閣、の建設、その他数多くの文化財保護にあたられましたことは、諸先生が述べられており、今さら繰返すまでもございませんが、

井上前会長の後を受け、史談会の会長として、歴史教育の大衆化のために尽くされてこられた中野先生の六十年に渡る郷土史研究、文化財保護活動等が報いら

れ、昨秋神奈川文化賞を受賞されたのでした。先生の榮譽を称える、小田原での祝賀会が盛大に行われたのが去る二月でした。その喜びの余韻がまだ消えざらな

私がかわりました「小田原史談会」のことをかえり見ますと、会が結成されてから三十二年になります。当初は市長鈴木十郎先生の会長が十年、その後井上英

中野先生の逝去に思う

小田原史談会 杉崎 正五

一先生の中途二回会長を御務めになりましたが、約半分の十数年間は、中野先生でございました。会報を御覧になればわかります様に、

中野先生を思んで

小田原史談会 相澤 栄一

ジャック・フェデーの「外人部隊」、デ・ビュウビュウの「望郷」、小津安次郎の作品等について語り合っ

創刊号から先生の原稿を頂戴し、会報の大半は、先生の原稿といっても過言でない程でございます

また、史跡巡りにしても、下見までして道路や昼食所まで困らない様に、それに、先生がおられ、ばこそ、中野調と言われる程、親切丁寧なご説明がありましたばかりに、史跡巡りも面白

ま、マレー作戦が始まった、昭和十六年の頃でした。私達が大政翼賛会文化部の小田原支部を結成し、その記念講演会を、文化部副部長の上泉秀信氏、外を招いて、

原の古戦場跡を旅した事もありました。また、東北仙台の政宗の城跡青葉城から松島へ、そして平泉に行き藤原一族の権勢の象徴のようなかんざしを歩

打たれ、毛越寺の名園を歩いて、「夏草や兵どもが夢のあと」を詠んだ芭蕉の心境に共感いたしました。厳美溪に宿をととり、陸中海岸迄足をのびました。潮風が香う大島の浜辺の店で海から上ったばかりの磯魚や帆立貝の素朴な料理に、その初々しい味に会心の笑を

もろしながら、盃を傾けて居られた先生あの元気な顔が私の目に浮んで来ると、

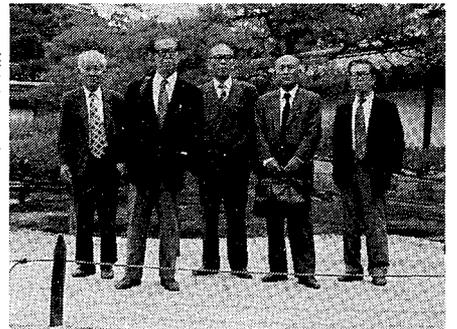
頂く様にと、各地区ごとに講演会を開き、会員の募集につとめられたのです。それがため一時は会員が五百名を超すこともありました。先生がおっしゃるには

先生のご写真を見るに付け、笑顔いっぱい御姿が目につきます。

小田原に來られて六十年、この地方の郷土史研究に生涯をかけて、小田原人になりきって居られる筈の先生が何故か自己の余所者意識を最後まで捨てなかつた。

保守的な城下町の土壌が培った排外意識、それがかった小田原人であったかも知れません。多感でリベラ

ルな若き時代に抱いたそれへの抵抗を先生がいまだに持ち続けて来た故ではなからうか。情熱をこめた得意な語り口で私達にいつも楽しい歴史のロマンを語りかけてくれた先生あの声が聞えて来ようです。先生のお冥福を祈ります。



史蹟めぐりで

忘れません。先生の安らかな御冥福を御祈り申し上げます。



来世へ飾る錦

元小田原図書館長 石井富之助



社会教育課長時代 右隣り鈴木市長 石井図書館長

中野敬次郎氏の神奈川県文化賞受賞祝賀会は二月六日に市庁舎七階で開催された。開会の前にわたしは控室にいた中野さんのところへお祝の言葉を述べに行った。中野さんは「みなさんのお蔭で」と喜んでおられたが、顔色がすぐれず、口辺が妙にゆがんで見えた。「ハテナ、病気かな。どこか悪いんじゃないかな。」とその時わたしは思ったものである。祝賀会は盛大に行なわれたが、中野さんは、それから数日後体調をくずされて市立病院に入院、三月十二日に亡くなられた。

中野さんもかとわたしは思った。去年の十二月に石井前助役が逝き、子供のころから親しかった門松茂夫さんがこの世を去った。それ、友ひとり減りふたり減り年新しいなどという俳句を作ったりしたが、今年に入って元小田高の校長松本武雄君が死んだ。松本は小田中の同級生であった。そして、今度中野さんである。むかしなら長命といわれた八十歳を越えたことだし、定命とあれば致し方のないことであるが、やっぱり寂しいことである。わたしと中野さんとのつきあいは長き。はつきり

昭和十二年だったか、図書館に読奨会という会が生れた。読奨会は郷土研究家や有識者が集って自然にできた会で、毎月例会を開き、もっぱら片岡永左衛門、中野敬次郎両氏を講師として郷土の話聞いた。これと時を同じくして、「安思我里」という郷土雑誌が発刊された。東海新報の神保国夫さんが南天堂と相談し、わたしにも一枚加われというので名前だけということで参加したが、中野さんはこの「安思我里」の重要な執筆メンバーの一人だった。さらに昭和十六年には図書館の外郭団体として小田

原国民文学研究会が生まれた。会員には三好達治、深沢正策、川崎長太郎をはじめ学校の先生、詩人、歌人、俳人、美術家その他有識者が名をつらね、講演会、展覧会、座談会等活発な活動を続けたが、中野さんは、こどもでも推進的な役割を果たしている。

終戦以前のことを知っている人はきわめて少なくなっている。図書館と関係のあったことを並べたが、中野さんは郷土史の研究に努力するからなら、もうこのころから社会的活動を行なっていたのである。それから後の中野さんの業績については皆さんの方がよく知っている。中野さんおふれないうえ、小田原における郷土史研究の流れをふりかえってみると、明治、大正から昭和にかけて片岡永左衛門がおり、それを中野敬次郎、長谷川秀麿が受け継ぎ、さらにそれを立木望隆、内田哲夫、岩崎宗純などが引き継いでいる。うかつこうになっている。今ここから中野さんを除いたとしたらどうであろうか。そこにポツカリ大きな穴があいて、わからない点がたくさん出てくると思う。はわたしだけではな



福田正夫記念碑除幕式 (昭34. 1. 26)

と覚えていないが、昭和九年にわたしが図書館に入ってから間もなくのことだったろうと思う。

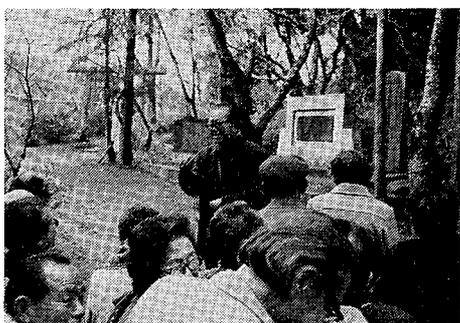
図書館は郷土資料を集めることを重要な仕事としていたから、郷土史研究家はたれかれとなくやってきた。片岡永左衛門はほとんど毎日のように来館する。松隈義旗、柏木正賢、山田又市などの古老も図書館の常連といつてよかった。その中にまじって中野さんや旭ヶ丘の長谷川秀麿(晴康)氏などもやってきた。わたしはこういう人たちから大いに耳学問をしたものであった。

百年史」を開いてみると、実に幅の広い分野にわたっての研究が展開されている。わたしの図書館経営の中でこれらの研究がどれだけ役に立っているか、まことにはかり知れないものがある。わたしはここにあらためて中野さんの研究に対し敬意と感謝を表したいと思うのである。

中野さんの神奈川県文化賞受賞はだれが見ても遅きに失したというほかはない。祝賀会で「今後も永く小田原のために尽したい」と挨拶された。中野さんは第二の故郷である小田原のためにまだまだ役に立ちたいという念願を持っていたにちがいないと思う。しかし、その暇もなく逝ってしまった。

故郷へ錦を飾るといふ言葉があるが、中野さんの文化賞は来世へ飾る錦となっ

最後となった先生の解説 昭六二・一・二五初詣 香取神宮にて



最後となった先生の解説 昭六二・一・二五初詣 香取神宮にて

中野先生を偲んで

元東大教授 杉山博

中野敬次郎先生は、明治三十六年（一九〇三）癸卯五月八日のお生れであるから、大正七年（一九一八）八月四日生れの私の十五年以上の上長であられた。先生は、大正十五年（一九二〇）に神宮皇学館を卒業されると、たゞちに小田原中学校（現在の小田原高校）に奉職されて、以来今日に至るまで、六十年余、小田原に定住されて、小田原の教育と文化と歴史研究とに、専念し続けられた。教育面では、小田原中学―小田原高校―旭丘高校の教師として、多数の後進を指導された。とくに小田原高校では、先生の授業は、小田高の名物授業で、今日でもなお多くの卒業生が、それを回想しているほどである。

文化面では、小田原市社会教育課長・文武館々長・中央公民館々長・尊徳記念館々長・小田原市文化財保護委員長等々の要職を歴任され、その功績により、昨年「神奈川文化賞」を受賞されたのは、周知のことであった。



史蹟めぐり

第一は、私

しかし、先生の真髓とされるところは、その歴史研究である。その成果は、『小田原近代百年史』・『三宮金次郎』・『箱根と伊豆』・『箱根細工の歴史』・『小田原市史料歴史編』・『石橋山合戦前後』・『曾我兄弟』など、きわめて多方面・多数に及んでいる。が、その論稿に至っては、おそらく百指を越える状況であったと思われる。その意味で、先生の全著作・全論文を『中野敬次郎全集』として刊行することは、後進のわれわれの任務ではあるまいか。各位の御協力を依頼したい。

今回は、私ごとで恐縮であるが、先生と私の関係の二をのべて、先生をお偲び申し上げることしたい。

自身が生れたところは、くしくも先生の御葬儀が行なわれた南町二丁目の三十二区公民館の地であったというのである。先生は大正十五年に小田原に來住された当初は、現在の地に定住されたのではない。しかし、のちに現住所に來住されたのである。私が生れた大正七年の頃、先生の現住所と現公民館の地には、私の伯父の阿部宗孝（伝）が、辻村太郎家の下屋敷を借り受けて住んでいた。（当時伯父は、小田原中学校の第二代目の校長であったので、私の父母も、宗孝一家を頼って來住していたのである。この辻村さんの家は、大正十二年の大震災によって全潰し、私の兄もこのとき死亡した。震災によって阿部一

家も東京に難をさき、伯父自身も、新設された東京府立第六中学校に転出して小田原をはなれた。その結果、現公民館とその周辺の地は、阿部宗孝の弟の安積の所有となり、こゝに阿部安積の子の宗武・宗文らが住んで、小田原に通学することになった。その大正十五年頃に、中野先生が小田原にこられた。伯父の宗孝は、中野先生を、満州の地にお迎えし（現住所）に居を定められたこととなったのである。

阿部宗孝のちに東京府立高校（現在の都立大学）の校長をへて昭和十六年十月には満州国師導高等学校長になり、昭和十九年三月三十一日、七十歳で没した。（『思い出の陸柱』参照）それとともに、小田原における阿部家の家も土地も、他人の手に渡ることになった。伯父の宗孝は、中野先生を、満州の地にお迎えした。再三にわたって懇請したが、幸いにもそれが実現できなかったことは、先生の得意とするところは、北条早雲を中心とする戦国時代史であったことは、周知のことであるが、『小田原近代百年史』の大著が出版され、誰だったか名前を忘れたが「先生が近代をあんなんにくわしいとは知りませんでしたよ」と感想を述べた時、「冗談いっちゃいけないよ。わしは近代が専門で歴史研究は余戯だよ」と笑っておられた。その時は本心かも知れないと思っ

小田原のエンサイクロペディスト

東泉禅院 岸達志

中野先生に最初にお目にかかったのは、昭和十何年だったか、県下地方史の草分けともいべき石野球先生の史蹟めぐりの会（現武相文化協会の前身）であった。草ぼうぼうの荒涼とした小田原城の天守閣跡で、

中野先生がメモや原稿を手にして話されたのを一度も見たことがない。年月日から固有名詞まで、掌をさすように話される記憶の確かさと、頭の中にすっきり事実が整理されている明晰さは誰もが感心するところであ

中野先生の歴史研究は、考証や踏査を厳密とする専門家と肌合が一味違って、網羅的な通史概説、私流に言えば小田原地方の史的エンサイクロペディアとでも表現すべきだと思っ

そして、天守閣の復興提唱や、初期の社会教育課長就任をはじめとして文化行政の面でも大きな仕事を残されている。

先生はいつか、「郷里の伊勢には家もあるので学校を卒業して少しの間小田原で教えるつもりだったのにととうとう一生になってしまった」と話されたことがあった。英雄北条早雲を語る時、だんだん話に熱が入ってくると、自分と早雲の映像が重なり合ってしまう如くに

六十二年度文化団体連絡協議会賀詞交換市長を囲む会は、二月三日市民会館で行なわれました、市長がお帰りになった後、役員の一

人が立ち上って、中野先生は最早会長を引退すべきであるとの発言があった。後でその役員の方にお伺いすると、最近の先生は御体の具合が変で奥様が御心配されての御配慮とのことであった。その時の先生はいくらか昂奮気味で「何をいうか失礼な」とおっしゃった。

瞬間私は先生のいのち燃えつきるまで文化へのはげしい情熱を感じとった。東京の老ハイヤーの運転手の言葉が脳裏をよぎる。その運転手は八十歳を越えていた。アクセルとブレーキの踏み方が鮮やかで乗り

さえ見うけられた。先生の史談が聞く者に共感共鳴を与え興味津々だった秘密がその辺にかくされているように思えてならない。

旧制小田中の生徒の間では「なんでも知っている中野さん」とよばれたそうだが、まさになにをきいても答えられないことはなかった。今後の小田原地方史が中野先生の業績の上に展開されてゆくことは間違いないことであろう。

早雲は西より出て劔をもつ心地の良さをほめると彼は云った。「私は八十二歳で家族の者はやめるといいますが、私は車が好きでね、どうしてもやめられないですよ」車で神経を使えば長生き出来ないであろうと日頃思っていた私は、これが

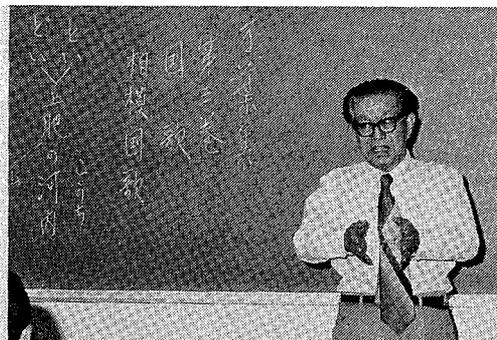
て小田原城主となったが、中野先生は同じく西より出てペンをもって小田原城主となったともいえるだろう。まさに男児の本懐ともいべき御一生ではなかったかと省みてふかく敬意と甲意とを捧げる次第である。中野先生は早雲寺を菩提寺として眠りにつかれると

長生きの秘訣と聞いてびっくりしました。仕事にかけると情熱は年齢を超える、そう感じたのです。けれどもも思わざる難病はすでに先生を蝕んでいた。中野先生真文化賞受賞をお祝する会が二月六日市役

文化の伝承

小田原市文連 会長 椎野 泰

所で開かれ、先生は三百人を越える関係者の方々の祝福を受けられて、私も万歳三唱の首頭をとらせて頂いた。披露宴の時私の隣におすわりになって、「椎野さん疲れたよ」とおっしゃった。御顔の色が凄く悪かった。その時撮って頂いた写真はお別かれの写真となった。二回市立病院にお伺いした時、「僕はもう駄目だ」とおっしゃる。そばから譲原嘉市先生が「何を言われる。」と強く励まされる。日頃の先生とは



湯河原での講演(昭50.7.16)

「この芸とは衆人愛敬をもて一座建立の寿福とせり。よくよくこの風俗のきわめをみるに、貴所、山寺、遠國、諸社の祭礼に至るまでおしなべてそしりを得ざらんを、寿福達人のしてと申すべきや。いかなる上手なりとも、衆人愛敬かけたることを、衆人愛敬と、高い芸術性と、その伝承と、香り高い小田原の文化への精進、一座建立の精神こそ、先生から受けつぐ、我々の高い使命であろうと考える。」

信じられない気弱な言葉であった。それから間もなく御他界である。先生の文化にかける情熱とは何だったのだろうか。私は今静かに考える。OCL No.一五に掲載された会長あいさつで先生はこう申し残される。

「我々地域文化にたづさわる人々は、能楽、茶道のみならず、みな一座建立の精神が大切であると思う。自分達の流派、会、グループを心から愛し、その維持と発展にたゆみない努力をしなければならぬ。そして立派な一座建立をしなければならぬと思うのである。」

私は再び古書を繙いてみる。「花伝書」奥儀に云う

これ第一道のすたるべき因縁なり道のための嗜みには、寿福増長あるべし。寿福のための嗜みには、道正にすたるべし。一般大衆の愛好(衆人愛敬)を以て、一座を維持し繁栄させてゆくという前段の言葉は、大衆に妥協であり、権力者に迎合的であるとも



神奈川文化賞受賞祝賀会で

中野先生あれこれ

小田原市文化財
保護委員 稲葉博

私の中野先生の著書に、
はじめて接したのは、三十
年ほど前、ある人から見せ
て頂いた、箱根阿弥陀寺に
秘蔵される和宮の念持仏に
ついての小冊子であった。

少年時代、私は東京芝に
住んでいたので、増上寺に
はしじゅう遊びに行ってい
た。戦災で焼けてしまった
が、徳川歴代将軍の靈廟や、
縁日で賑わった閻魔堂、東
京でも四つしかなかった五
重塔等が懐しく憶い出され
る。また、大本堂の横、地
下に造られた廟があり、暗
いコンクリートの階段を下
りて、薄気味悪い死者の世
界をかきまわるとは、子
供心には一寸した肝だめし
の場でもあった。後で知っ
たが、これが静寛院宮（和
宮）親子内親王の奥津城で
あった。その親子夫人が箱
根塔の沢で静養され、念持
仏、黒本尊が阿弥陀寺に伝
わっていることを二十年後
に知り、驚きとなつかしさ
とで深い感銘を覚えたもの
である。以来先生の著書か
らは、随分と学恩を蒙った
が、これが最初の出合いで

あり、一番印象的な思い出
である。
その一、二年後の夏のあ
る夜、本町小学校で丹沢に
ついてのスライド映写の会
が開かれた。私は性来山登
りは好きで、この頃折あら
ば丹沢の尾根や沢などもか
け廻っていたので喜んで見
会に出席し、スライドで見
る丹沢の風光に心打たれ、
曾遊の地には懐旧の情を覚
え、未知の世界には近々来
訪の決意を固めていた。そ
の後で中野先生の講演が行
われた。始めは何で先生が
丹沢登山の集いに出られた
のかよくわからなかったが、
話を伺う中に単に郷土史だ
けでない豊かな経験と深い
学殖に圧倒される思いで、
先生の姿がまるで屹立し磐
居する丹沢山塊そのものの
ように見えたものである。

その後、昭和三十年代に
時折、早朝お目にかかるこ
とがあった。当時、市教委
は現在の城内野球場のそば
の青少年会館の位置にあり
社会教育課長の先生は、毎
朝八時四十分頃、お茶壺橋
を渡り常盤木門の下を通っ

て役所に通って居られた。
私は旧校舍時代の城内高校
に通うのに丁度先生と同じ
道を通るので、何か所用が
あって五分か十分遅れて行
くと必ず先生とぶつかった。
私も工合が悪いので軽く会
釈する程度でそくそくと通
りぬけ、先生も「こいつ又
遅れたな」と云わんばかり
の目付でジロリと睨みなが
らすれ違おうという妙な出合
いであった。

これが昭和五十年代にな
り、文化財保護の仕事を共
にする頃から、先生と直接
飲み交し、その含蓄ある座
談を十二分に味わせて頂く
こととなった。正直いって
委員会での固い風貌の先生
より、終って後の一杯の席
での先生ははるかに楽しく
有益であった。

もっとも年に一度の行政
視察旅行の時は逆に「今度
はどこへ連れて行ってくれ
るかねえ」と、先生の方が
楽しみにされていた。私も
なるべく先生のあまりご存
知ない、そして喜ばれそう
な所を選んだものである。

その一つ、昭和五十七年
三月伊賀上野から梅の月が
瀬、柳生芳徳寺、円成寺、
五條栄山寺、粉河寺の旅の
折、伊賀大山田村の新大仏
寺を非常に楽しみにされた。
新大仏寺は奈良東大寺を再
興した鎌倉初期の名僧、俊

乗坊重源が造立し安阿弥快
慶作の阿弥陀三尊立像を安
置した名刹である、しかも
付近は平家の重臣、肥後守
貞能ゆかりの地でもあるの
で、是非ご案内しようと思っ
ていた。それにこの地には、
先生の姪のイクさんが独り
住いをされていたのでその
対面も楽しみだったわけ
である。

ところが、車が名古屋市
内を抜けるのに予想外に手
間どり、上野城下に着いた
時はとうとう大山田まで足
を延ばすことは不可能にな
った。やむなく我々は、上野
城を見学し、その間、先生
には車で大山田に行って頂
くこととした。

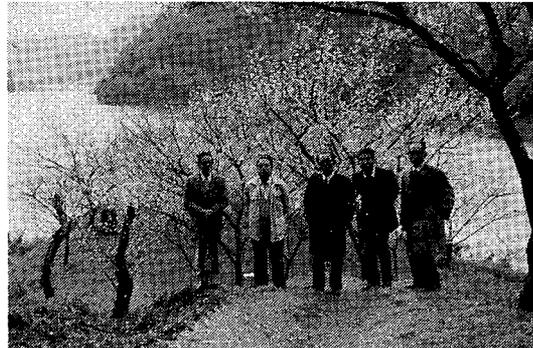
城の見学を終え、旅館に
ついてくつろいで
いる我々
より、や
や遅れて
帰ってこ
られた先
生は「イ
ヤア、い
い思いを
させて頂
いた、新
大仏寺は
大した寺
だ、素晴
らしく勉
強になっ
たよ」と

声はずませて居られた。
姪御さんは先生の一番上の
姉さんの娘だけに年も近く
話もよく合う間柄だったが、
この地を訪ねたことはなかつ
たので先生も心から喜ばれ
て居た。それに梅花馥郁と
薫る地を最愛の姪御さんに
案内されて、この古刹を廻
る風景を憶うと、私も何か
とてもよいことをし、先生
から蒙った学恩にいささか
報いることが出来た思いで
あった（イクさんとはこれ
が最後の会となった）。

その夜、旧家老の邸とい
う重厚な宿の一室で伺った
のは、西丹沢の秘境、今は
全部消えてしまった地蔵平
の旧家、武田の残党と伝え
られる雁丸家、松田家の物
語で、地酒の味も加わった
からか実に脂の乗った語り
口で、さながら人情話の名
人芸を聞く感があった。
私は、ここ数年、小冊が
出る度に先生に献本してい
た。これに対し先生は、種々
有益な批評忠告を下さつ
たが、最後に差上げたのは
去年秋に出版した「関東古
社名刹の旅」で、これを手
紙を指さして、「この写真
はよく撮れてるねえ」と何
かとても嬉しそうにほめて
下さった。
今改めて見直せば、それ
は滴るばかりの翠巒を背に
した塔之沢阿弥陀寺の風景
であった。



五條 栄山寺にて



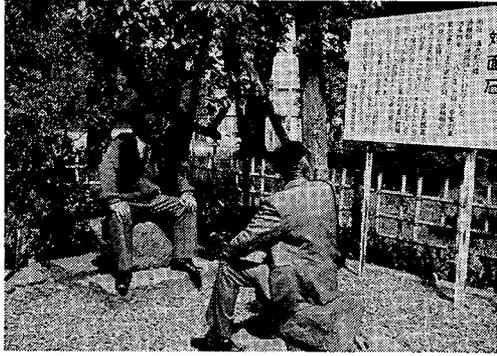
梅の月ヶ瀬にて(昭和五十二年)

中野先生と史談会

史談会理事 高田喜久三

近來歴史に寄せる一般の関心が非常に高まっている。殊に郷土史の面では、各地それぞれの数多くの郷土史家なる人物が存在して、一般市民を対象に郷土史の発掘、保存の仕事、或いは歴史探求精神の涵養につとめている。小田原でも同様であるが、わが小田原史談会はずでに三十余年の歴史を持つて数々の業績を遺してきた。そしてこのたび永眠された中野敬次郎先生は昭和四十五年以来、史談会々長として史談会事業の中心として活躍された。

史談会は歴史学者の集まりではない。歴史、殊に郷土史に強い関心を持つ四百余名の会員を対象に、講演見学を実施し、年四回会報を発行して諸行事に参加出来る。従って史談会の仕事はむづかしい研究ではない。



頼朝陣営跡にて(昭六二・四・二七)

く、分り易く興味深く郷土史を学ぶことが、その真髄であると私は信じている。その意味で中野先生の講話はまことに興味しんしたる話ぶり、聴衆をして知らず知らずのうちに史実を体得する楽しさを与えて下さった。

昨年、沼津市黄瀬川の遺跡にご案内頂いた折には、頼朝、義経の対面石に、実際に坐って頂き、私はその対面に坐った。もちろん冗談のつもりであったが、図

中野先生と地震 (2)

— 小田原城について —

史談会理事 和田 登

市役所のロビーに小田原城の模型がある。白くないので、どこかの城かと思われるが、現在の小田原城の五分の一の模型である。説明には、小田原城天守閣 寛永十年(一六三三)、元禄十六年(一七一一)等の大地震により損壊し、それぞれ再興されましたが、藩籍奉還にともない、明治三年(一八七〇)十一月に取り壊され今日に至っています。小田原市が、市制施行の二十周年事業として築造したもので、(昭和三十三年五月二十五日)

今年初詣、香取鹿島参拝の帰途、佐原市の伊能忠敬の生家を訪ねた折にも、その前面を流れる掘割の河水を江戸時代の運搬船が往來したことを説明されて、私はしばし夕景色の中をたずんでいた。江戸時代の風物がありありと目に浮か

らずも中世の人、頼朝義経の心情がわが心中に浮み出てくるのを感じて、私はこの時ほど史談会の存在をありがたく思ったことはなかった。

掘割に入日よみて冬柳の心持がわが心中に浮み出てくるのを感じて、私はこの時ほど史談会の存在をありがたく思ったことはなかった。

とつひとつに、私は中野先生の偉をいつもダブらせているのである。中野先生亡きいま、如何にして小田原史談会をさらに意義あるものに発展させてゆくべきか。それこそ遺された私たちの責務であると考えざるを得ない。

と内側の構造とは、まるっきり異っている。地下一階とあるので、是非地下に入っ

と内側の構造とは、まるっきり異っている。地下一階とあるので、是非地下に入っ

- 小田原城復興碑 (二階にあがるとすぐに、宝永二年小田原城復興碑がある、中野先生はこれをよく見てこいと云われたのだと思った。)
- 中野先生の『近世小田原ものがたり』の中の「小田原大地震の歴史」の中に、江戸時代以後小田原が地震の中心であったものは、
- 寛永十年一月二十一日 (一六三三年三月一日)
- 元禄十六年十一月十一日 (一七三一年三月三日)
- 天明二年七月十五日 (一七九二年八月三日)
- 嘉永六年二月二日 (一八三三年三月二日)
- 大正十二年九月一日 (一九二三年九月一日)
- 小田原城復興碑 元禄十六癸未年十一月廿二日夜地震天守城楼回禄翌年春葺(はじめ)再興之事宝永二乙酉年四月日天守楼以下迄外郭惣石壁築成矣於是彫攻干疊石以誌焉
- 從四位相州小田原城主兼隱岐守藤原朝臣大久保氏長 忠増再管
- 元禄十六年(一七一一)十一月二十三日午前二時に大地

震があつて、天守閣はじめ、城郭全部が焼失または崩壊したので、大久保忠増は直ちに復興事業に着手した。

宝永二年(一七〇五)春四月工事が完成したので、その由来を石に刻して後世に残した記念碑である。大正十二年関東大震災のとき、天守台の石垣が崩れて、その中から発見されたものである。この資料を見ると、復興の喜びが目に見えるようである。元禄の小田原の大地震は大へんなものだったと思う。

中野先生の「小田原の大地震の歴史」には、この地震について詳細に書かれているが、資料は元禄年録、基量郷日記、月堂見聞集、武江年表、甘露叢(震災予防調査報告第四十六号所収)、配島伊信、伊盛覚書である。なお、先生の所載する「古余綾(こゆるぎ)見聞志」によつて、地震で出世した真田六右衛門の話が出てくる。

小田原城天守閣模型(大久保神社蔵)の説明文「この模型は第一層は東西面二尺九寸七分五厘、南北面三尺五寸七分五厘、第二層は東西面二尺二寸七分五厘、南北面二尺九寸二分五厘、第三層は東西面一尺六寸二分五厘、南北面二尺二寸七分五厘あつて、高さ四尺二寸五分である。天主閣実際の一間(六尺五寸)を模型では三寸二分五厘の割で縮尺して実物の十分の一の模型である。製作者は小田原の木工棟梁香川文造高行で文久年間の作という。新天守閣は、この模型を基として復興した。

大久保神社模型の方が古く見えるが、この方が、新しい現在の天守の模型で、二層三層が小さい。保存状態のよい悪いによつて、見た目には、古くも新しくも見えるものようである。中野先生の資料には、高さは小さい方が四尺二寸五分(天明模型)大きい方の高さ五尺一寸とある(宝永模型)。両方とも第一層の大きさは同じであるが、二層三層が小さくなつてくる。中野先生は、「地震でも倒れないような天守閣に変えてゆこうとして、上部が軽くて小さい天守閣に改造され、高さも低くなつてきたようである。特に天明大地震後にこの配慮が大きくなったものと思われる。天明模型がこの気持をあらわしている」と結ばれている。

中野先生の「小田原大地震の歴史」の中には、寛永大地震について「孝亮宿弥日記」「家乗略」「江城年録」「細川家記」など、元禄大地震について、1女舞大天桐大内蔵の死亡記、2大須賀丹右衛門政重の奮闘記、3真田六右衛門出世物語など興味深く書かれている。

なおこの元禄の大地震で、城下だけで、死者九〇〇名を数えたので、藩主大久保忠増の命によつて死者を桶に入れて車にのせて城北の谷津の一隅に運んで葬らせ、慰霊の大施餓鬼を挙げた。それが慈眼寺のおこりである。慈眼寺には、六百余名の人々の院号とその在住町村名が一軸になつていて、いうから、是非拝見したいと思つてゐる。

天明の大地震については、川部匠大夫が北東に三十度傾いた天守閣を綱をかけて引き起したことなく、興味深く書かれてゐる。

嘉永の大地震については「藩士関重磨の実録」「続々泰平年表」「校正三代一覽」「高麗環雑記」などの資料から記されていとおもしろい。

なお、郷土文化館にコピーがぶらさがつていたのでみたら、「林田八藏地震御屈書の写」であつた。

旧天守閣に安置されていた八尊の一つで、忠朝の愛蔵のものである。忠朝は一旗本の次男に生まれ、後、本家をついで、小田原城主となり、老中筆頭まで栄達したの、若い頃から摩利支天を信仰したためだといふので、入城のとき天守閣に奉安した。元禄十六年の大地震のとき天守閣は全焼したが、これは災をまぬがれたので、御天守摩利支天と呼ばれ尊崇された。明治三年の取壊しのとき谷津永久寺に移してあつたのを新天守に移した。と記されている。

小田原城の瓦、天守閣の二階の一部に、大久保氏の家紋の瓦と、徳川氏の家紋の瓦が並んで陳列されている。本丸の瓦は大久保氏の家紋であるが、旧天守閣の紋は徳川氏の家紋である。天守閣が徳川氏の家紋をつけていたこととは、徳川の城ということになるのではないかと思ふ。地震のための災害、酒匂川の洪水による災害など重なつて、幕府からの借財は大へ

次から次へと災害をこうむつた小田原が、借財を重ねながらも災害地を天領としてあづけたりして切りぬけた大久保さんは、小田原にとっては実にありがたい大名で名君であつたと思ふ。小田原は地震と火災と水

天守閣の模型

復興碑の前を右に進むと模型が二つ並んでいる。説明文の一方には寸法が入っていないので、記載されている寸法だけと比較が出来る

中野先生は、「地震でも倒れないような天守閣に変えてゆこうとして、上部が軽くて小さい天守閣に改造され、高さも低くなつてきたようである。特に天明大地震後にこの配慮が大きくなったものと思われる。天明模型がこの気持をあらわしている」と結ばれている。

中野先生の「小田原大地震の歴史」の中には、寛永大地震について「孝亮宿弥日記」「家乗略」「江城年録」「細川家記」など、元禄大地震について、1女舞大天桐大内蔵の死亡記、2大須賀丹右衛門政重の奮闘記、3真田六右衛門出世物語など興味深く書かれている。

なおこの元禄の大地震で、城下だけで、死者九〇〇名を数えたので、藩主大久保忠増の命によつて死者を桶に入れて車にのせて城北の谷津の一隅に運んで葬らせ、慰霊の大施餓鬼を挙げた。それが慈眼寺のおこりである。慈眼寺には、六百余名の人々の院号とその在住町村名が一軸になつていて、いうから、是非拝見したいと思つてゐる。

天明の大地震については、川部匠大夫が北東に三十度傾いた天守閣を綱をかけて引き起したことなく、興味深く書かれてゐる。

嘉永の大地震については「藩士関重磨の実録」「続々泰平年表」「校正三代一覽」「高麗環雑記」などの資料から記されていとおもしろい。

なお、郷土文化館にコピーがぶらさがつていたのでみたら、「林田八藏地震御屈書の写」であつた。

旧天守閣に安置されていた八尊の一つで、忠朝の愛蔵のものである。忠朝は一旗本の次男に生まれ、後、本家をついで、小田原城主となり、老中筆頭まで栄達したの、若い頃から摩利支天を信仰したためだといふので、入城のとき天守閣に奉安した。元禄十六年の大地震のとき天守閣は全焼したが、これは災をまぬがれたので、御天守摩利支天と呼ばれ尊崇された。明治三年の取壊しのとき谷津永久寺に移してあつたのを新天守に移した。と記されている。

小田原城の瓦、天守閣の二階の一部に、大久保氏の家紋の瓦と、徳川氏の家紋の瓦が並んで陳列されている。本丸の瓦は大久保氏の家紋であるが、旧天守閣の紋は徳川氏の家紋である。天守閣が徳川氏の家紋をつけていたこととは、徳川の城ということになるのではないかと思ふ。地震のための災害、酒匂川の洪水による災害など重なつて、幕府からの借財は大へ

てゆこうとして、上部が軽くて小さい天守閣に改造され、高さも低くなつてきたようである。特に天明大地震後にこの配慮が大きくなったものと思われる。天明模型がこの気持をあらわしている」と結ばれている。

中野先生の「小田原大地震の歴史」の中には、寛永大地震について「孝亮宿弥日記」「家乗略」「江城年録」「細川家記」など、元禄大地震について、1女舞大天桐大内蔵の死亡記、2大須賀丹右衛門政重の奮闘記、3真田六右衛門出世物語など興味深く書かれている。

なおこの元禄の大地震で、城下だけで、死者九〇〇名を数えたので、藩主大久保忠増の命によつて死者を桶に入れて車にのせて城北の谷津の一隅に運んで葬らせ、慰霊の大施餓鬼を挙げた。それが慈眼寺のおこりである。慈眼寺には、六百余名の人々の院号とその在住町村名が一軸になつていて、いうから、是非拝見したいと思つてゐる。

天明の大地震については、川部匠大夫が北東に三十度傾いた天守閣を綱をかけて引き起したことなく、興味深く書かれてゐる。

嘉永の大地震については「藩士関重磨の実録」「続々泰平年表」「校正三代一覽」「高麗環雑記」などの資料から記されていとおもしろい。

なお、郷土文化館にコピーがぶらさがつていたのでみたら、「林田八藏地震御屈書の写」であつた。

旧天守閣に安置されていた八尊の一つで、忠朝の愛蔵のものである。忠朝は一旗本の次男に生まれ、後、本家をついで、小田原城主となり、老中筆頭まで栄達したの、若い頃から摩利支天を信仰したためだといふので、入城のとき天守閣に奉安した。元禄十六年の大地震のとき天守閣は全焼したが、これは災をまぬがれたので、御天守摩利支天と呼ばれ尊崇された。明治三年の取壊しのとき谷津永久寺に移してあつたのを新天守に移した。と記されている。

小田原城の瓦、天守閣の二階の一部に、大久保氏の家紋の瓦と、徳川氏の家紋の瓦が並んで陳列されている。本丸の瓦は大久保氏の家紋であるが、旧天守閣の紋は徳川氏の家紋である。天守閣が徳川氏の家紋をつけていたこととは、徳川の城ということになるのではないかと思ふ。地震のための災害、酒匂川の洪水による災害など重なつて、幕府からの借財は大へ

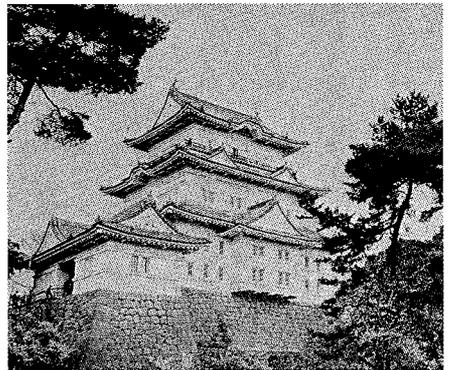
次から次へと災害をこうむつた小田原が、借財を重ねながらも災害地を天領としてあづけたりして切りぬけた大久保さんは、小田原にとっては実にありがたい大名で名君であつたと思ふ。小田原は地震と火災と水

天守閣の模型

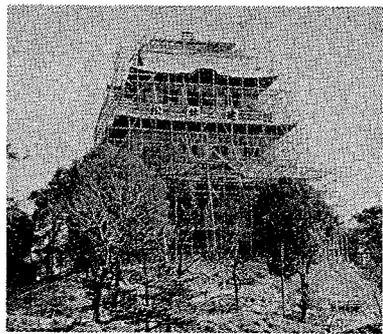
復興碑の前を右に進むと模型が二つ並んでいる。説明文の一方には寸法が入っていないので、記載されている寸法だけと比較が出来る

中野先生は、「地震でも倒れないような天守閣に変えてゆこうとして、上部が軽くて小さい天守閣に改造され、高さも低くなつてきたようである。特に天明大地震後にこの配慮が大きくなったものと思われる。天明模型がこの気持をあらわしている」と結ばれている。

中野先生の「小田原大地震の歴史」の中には、寛永大地震について「孝亮宿弥日記」「家乗略」「江城年録」「細川家記」など、元禄大地震について、1女舞大天桐大内蔵の死亡記、2大須賀丹右衛門政重の奮闘記、3真田六右衛門出世物語など興味深く書かれている。



再建工事中の小田原城天守閣



小田原城の城郭等の復元について

小田原城の本丸のあたりから小田原城の天守閣をながめる。と本丸の復元が出来たらいいと思う。動物園は今の程度のものなら場所は他にありそうに思う。

現在小田原城の復元については研究されていると思うが、

書で、何百年もの間いためつけられていた。

今度の小田原をいためつける大災害は何であろうか。

火災のみの場合人災としてこれは防ぐことが可能であろう。水の方は今はとも

もおだやかであるが、そろそろ来るのではないか。水

害の方が頻度が高い。震災の方は大正十二年(私の四

歳の時)の関東大震災と同じ程度の地震が来る時期が

丁度来ていると中野先生はいわれる。同じ大きさの地

震で、同じ環境であれば同じ結果であろうが、当時よ

り環境が悪いと思われるところがあれば、災害はひど

いものになるだろう。

私も自分の環境を見まわして、なんとか生き残れる

だろうと思うが、災害にそなえなければならぬと思

どの時代のものにするかなかなか難しい。然し、江戸初期の型か、江戸末期の型かなど、この辺に焦点をあてれば、わかりやすいと思う。本丸あたりの建物は博物館、資料館として利用出来るようにしっかりとしたものを作つたらと思う。昔のままのものと同じ物を作れば、同じ程度の地震で災害に見舞われるから、外見は同じようにして(間取は同じ)材質を変えれば、災害にたえらるる半永久的なものが出来そうに思う。このことについては中野先生にお話を聞く機会がなかったのが残念である。なお現在掘っているところに石垣が見えたが、埋めたら早いとこ復元したらと思う。(附)

小田原城の地下室について、あることさえあまり知られていない、この地下室

戦後のひとこま

史談会理事 岡部忠夫

は見せてくれない。倉庫にしているらしいが、気にな

る。資料が入っているにしては、展示物が創立以来あまり変っていないようだ。展示については新しく発見された資料もあることだ

うから、例えば二階は小田原城に關係する資料の展示、

三階は江戸時代の小田原、四階は北条時代の小田原と

紫陽花の雨した、かに

濠を打つ

桐泉

敗けたばかりで、まだ世相が混沌とした、昭和二十年の十月のある夜、私は、

中野先生のお宅を訪問していた。

先生は、その折一冊のアメリカの雑誌を示された。

それが「ニューズウィーク」であったか、それとも「タイム」であったのか、記憶

がはっきりしないが、ともかく、鳥居をバックにして、

鉄帽をかぶったアメリカ兵が、片手に銃を持ち、高

かに勝どきを挙げた表紙であったように思う。『われ

勝てり! 神国日本を撃破せり!』といった調子の構

図だったような気がする。

「これを手に入れるには、骨を折つたよ」と、先生は言われたが。

その頃の私は、全く興味を持てなかった。

当時、アメリカの占領下で、日本人がアメリカの雑誌を入手するなど思ってもよ

じたのであった。ところで、話はあと先になるが、先生をお尋ねした

たが、どうにもしようがないが、どうにもしようがない



小田原出身の作家と共に
右より中野先生、川崎長太郎
尾崎一雄、北原武夫、藪田義雄

二年になって中野先生の東洋史である、この前の号に記したように、先生の脱線話は、面白く楽しく、また為にもなった。
天照大神の孫瓊瓊杵尊が大神の命を受け、豊原中大神を治めるため、高天原から日向の高千穂の峰に降臨する神話を、小学校では、歴史として教わったが、中

野先生は、「その昔、落下傘部隊があった訳でもあるまいし」と、神話をそのまま歴史とするのをやんわり否定したうえで、神話の持つ意義を話された。例えば「八岐大蛇」の話は種族とも考えられる、と今でいうならば「民俗学」的な見地からの説明であった。このとき、私は、(成程そうか)

と、合点がいく思いだったことを覚えていた。
そんな記憶から、先生はきつと、これから、日本が進むべき道を語ってくれるに違いないと思った。
青年団には金がないことを告げると、先生は謝礼などいらない言う、
私は、先生に講演をお願いしたことから、青年団員と共に、話を聞くことになっ

たが、講演は、間をおいて、何回かに分けて、夜、八幡神社前の公会堂で行われた。
先生は、国民服姿でやってこられた。失礼だが、背広は、とうに食糧に化けていたのかも知れない。
講演は期待した通りだった。
アテネの民主政治から始まり、マケドニアの台頭、アレクサンダーの登場、ローマの勃興等々、民族興亡の

歴史を説いた。特に印象的だったのは、その昔(六〇年)、唐・新羅の連合軍に破られた百済救援のため、送った日本の軍隊が、白村江の戦で敗北した、という話であった。今でこそ、日本史の教科書に載っていない別に目新しいことではないが、戦前までは、日本は、未だかつて、外国と戦って敗れたことのない立派な国だ、と教えられてきており、

昭和六十二年年度総会 会長に杉崎正五氏

昭和六十二年四月十九日(日)小田原市立郷土文化館において開催。故中野敬次郎会長の後任に杉崎正五副会長が選出され、残任期間を勤めることになった。
ついで、昭和六十一年度の事業報告、決算報告、監査報告と、六十二年度の事業計画、収支予算が承認されたのち、小田原市文化財保護委員・市史編纂委員の内田哲夫氏による「近世小田原の商業について」の講演が行われた。
事業報告、決算報告、事業計画、収支予算の通り
昭和六十一年度事業報告
六十一年四月廿日(日)

定期総会(市立郷土文化館) 報徳博物館長佐々井典比古氏講演「二宮尊徳と鶴沢作右衛門について」
四月二十七日(日) 第三回東海道全宿場史跡めぐり(十一宿三島十七宿興津)
五月二十五日(日) 新人物往来社、歴史研究神奈川支部と合同講演会開催
史談会会長中野敬次郎氏「後北条を支えた二人の女性」 歴研神奈川支部長齋藤圭太郎氏「板部岡江雪齋融成の出身の謎について」
五月二十八日(水)

六月二十九日(日) 第四回東海道全宿場史跡めぐり(十八宿清水市江尻二十二宿藤枝)
七月二十八日(日) 東学寺、東光院の仏像・仏画見学
九月二十八日(日) 第五回東海道全宿場史跡めぐり(二十三宿島田二十宿袋井)
十月十一日(土) 講演会 岡部忠夫氏「西さがみの野仏」
十二月三日(金) 四日(土) 一泊二泊
第六回東海道全宿場史跡めぐり(二十八宿磐田市見付三十五宿御油)
昭和六十二年一月二十五日(日) 初詣 香取、鹿島神宮参拝
二月三日(火) 市文化団体連絡協議会主催の市長懇談会に参加

二月六日(水) 中野敬次郎会長 神奈川文化賞受賞祝賀会に主催側として参加
二月十四日(土) 講演会 飯沼恒雄氏「提灯について」
三月十四日(土) 史談会会長故中野敬次郎氏の葬儀参加
三月二十四日(火) 市文連主催の他市交流研修会参加(青梅市)

小田原とは どういう都市か

石井富之助

内容

- 一、北条時代の小田原 (本号)
- 二、江戸時代の小田原 (次号)
- 三、明治時代の小田原
- 四、小田原駅開通から市制施行まで
- 五、終戦後の小田原
- 六、交通都市小田原

関東管領職を譲り受け、上杉政虎と改名した——と結んだ里見軍をふたたび下総国府台で撃破した。また永禄十二年(一五六一)には武田信玄が小田原に押寄せたが、籠城作戦によってよくこれを防いだ。

このようにして、氏康はいわゆる関八州を領有するようになつたのであるが、これだけ領国が拡大するとどうしてもこれを維持するためにその基礎を強固にすることが必要になつてくる。

氏康も当然検地、税制改革、軍役の確立などの諸政策を実施したが、それと同時に小田原それ自身の整備も進めたのであつた。

福田以久生、内田哲夫共著『わが町の歴史小田原』は東嶺智旺の『明淑録』の中の

町小路は数歩の間、地に一塵なし。東南は海なり。海水は小田原の麓をめぐらす。太守の壘は喬木森々として高館巨麗なり。三方に大池あり。池水は湛々として浅深はかるべからず。白鳥そのほかの水鳥翼々然たり。

という文章を引用して、小田原が氏康の館を中心に整備されつつあることをしるしている。

から氏康から四代氏政の時代にかけて進められたと見てよいのである。

北条氏は歴代民政に意を用いたので、『小田原記』に「津々浦々の町人、職人西国北国より群来る」とあるように、北条氏を慕って移住する者が多く、地方都市として相当の発展をとり、独自の小田原文化を生み出した。

大百科事典などをひらいてみると、小田原城だとか小田原評定だとか、小田原という名を冠したことば意外に多く採録されているの気がつく。事典をひけばだれにでもわかることわざわざひろうするまでもないことだが、一般にはこれに気がついていない人の方が多いと思うので、あえてその抜書を紹介して置くことにしよう。

小田原菊小判 相模国小田原で鑄造した銀貨。面に菊紋の極印と壹兩の字とあり。その種六。(一)は重量四匁三分。小田原北条氏は永楽錢一貫文に充つとあるが確かでない。

(二)重量四匁、十六葉菊小判という。(三)重量四匁二分。(五)銀鉞(大百科事典)

金貨。相模国小田原で鑄造されたもので、重量六匁。金位上。面に桐紋の極印。壹兩の字と行書で小田原金の四字をあらわす。(大百科事典)

小田原笹小判 相模国小田原で鑄造されたと伝えられる円形の判金。重量四匁二分。金位中。面に三箇の笹紋を印し、二百年前まで通用されたとあるが詳かでない。(大百科事典)

小田原菱小判 相模国小田原で鑄造されたもので、金小判と銀小判とがある。共に面に壹兩の二字と上下に菱紋を附す。量目金小判三匁三分。銀小判は三匁二分、四匁、四匁三分の三種。うち四匁三分のものは一に小倉小判という。(大百科事典)

小田原鉢 小田原鉢といふのは明珍信家が相州小田原で作ったかぶとをいうのである。(古事類苑、兵事部)

小田原鐔 相州小田原の鐔師正次一派の作った鐔。(大辞典)

小田原正次 桃山時代の鐔工。初め小田原に住し小田原氏を称す。のち肥前唐津に移る。細

透しに長ず。(大辞典)

小田原彫 彫木の器物に漆をもって髹装(きゅうそう)した物の名称。木製の器物に牡丹、梅花、菱、紗綾(さりょう)形、雲形等を彫刻し、その上に黒漆を施し、更に赤漆をもつて裝飾した、いわゆる紅花緑葉風を摸せるもので、小田原彫は一般に鎌倉彫よりは浅い。明応四年北条長氏、相模の小田原に據つたため、小田原は関東の都会となり、諸工人ここに集つて一種の様式ある器物を作つたので、その土地の名を冠したものである。(大百科事典)

小田原葺 けら葺と同様のものである。(大百科事典)

小田原提燈 箱提燈の形状細く筒状をなせるもので、必要に応じて伸縮自由となし得、豊んで懐中することが出来る。延宝頃の附会の句集「隠蓑」に「おもひの煙ふところ提燈」とよまれたものはこの提燈の進化したものである。もと相州小田原駅の人甚左衛門という者、天文の頃はじめて

一、北条時代の小田原
小田原の歴史ということになると大森時代あるいはそれ以上にさかのぼらなくてはなるまいが、小田原町の歴史といえば、町の形成が北条時代に行われているところから見て、せいぜい北条早雲までと考えれば事足りるであろう。したがって、この論稿も明應四年(一四九三)北条早雲が大森藤頼を襲つて、小田原城を奪取した時から始めることとする。

北条早雲が小田原を攻略したのは彼が六十四歳の時で、以後永正十六年(一五一九)八十八歳で韭山城に歿するまでの間に、三浦地方に強力な勢力をもつ三浦義同、義憲父子を攻め滅し、相模一円を手中に収めた。

二代氏綱は大永四年(一五二四)江戸城を攻めて城主扇

谷朝興を敗走させ、さらに天文六年(一五三七)には朝興のあとをついだ朝定を河越城から追放して、北武蔵を手に入れた。また天文七年(一五三〇)十月には下総国府台で足利義明、里見義堯の連合軍と戦つて大勝し、勢力を武蔵、下総まで伸ばした。

天文十年(一五四五)氏綱が没すると、三代氏康が二十七歳でその跡を嗣いだ。氏康は天文十四年(一五四五)扇谷朝定を河越城に攻めてこれを滅ぼし、永禄四年(一五五三)長尾景虎によって小田原城を包囲されたが、景虎が力及ばず軍をかえすと反撃に転じ、永禄六年(一五五五)武蔵松山城を攻奪した。さらに同年上杉政虎、長尾景虎は小田原城の囲みをといて鶴岡八幡宮に参りし、上杉憲政より

町小路は数歩の間、地に一塵なし。東南は海なり。海水は小田原の麓をめぐらす。太守の壘は喬木森々として高館巨麗なり。三方に大池あり。池水は湛々として浅深はかるべからず。白鳥そのほかの水鳥翼々然たり。

という文章を引用して、小田原が氏康の館を中心に整備されつつあることをしるしている。

小田原町の形成はどうや

から氏康から四代氏政の時代にかけて進められたと見てよいのである。

北条氏は歴代民政に意を用いたので、『小田原記』に「津々浦々の町人、職人西国北国より群来る」とあるように、北条氏を慕って移住する者が多く、地方都市として相当の発展をとり、独自の小田原文化を生み出した。

大百科事典などをひらいてみると、小田原城だとか小田原評定だとか、小田原という名を冠したことば意外に多く採録されているの気がつく。事典をひけばだれにでもわかることわざわざひろうするまでもないことだが、一般にはこれに気がついていない人の方が多いと思うので、あえてその抜書を紹介して置くことにしよう。

小田原菊小判 相模国小田原で鑄造した銀貨。面に菊紋の極印と壹兩の字とあり。その種六。(一)は重量四匁三分。小田原北条氏は永楽錢一貫文に充つとあるが確かでない。

(二)重量四匁、十六葉菊小判という。(三)重量四匁二分。(五)銀鉞(大百科事典)

金貨。相模国小田原で鑄造されたもので、重量六匁。金位上。面に桐紋の極印。壹兩の字と行書で小田原金の四字をあらわす。(大百科事典)

小田原笹小判 相模国小田原で鑄造されたと伝えられる円形の判金。重量四匁二分。金位中。面に三箇の笹紋を印し、二百年前まで通用されたとあるが詳かでない。(大百科事典)

小田原菱小判 相模国小田原で鑄造されたもので、金小判と銀小判とがある。共に面に壹兩の二字と上下に菱紋を附す。量目金小判三匁三分。銀小判は三匁二分、四匁、四匁三分の三種。うち四匁三分のものは一に小倉小判という。(大百科事典)

小田原鉢 小田原鉢といふのは明珍信家が相州小田原で作ったかぶとをいうのである。(古事類苑、兵事部)

小田原鐔 相州小田原の鐔師正次一派の作った鐔。(大辞典)

小田原正次 桃山時代の鐔工。初め小田原に住し小田原氏を称す。のち肥前唐津に移る。細

透しに長ず。(大辞典)

小田原彫 彫木の器物に漆をもって髹装(きゅうそう)した物の名称。木製の器物に牡丹、梅花、菱、紗綾(さりょう)形、雲形等を彫刻し、その上に黒漆を施し、更に赤漆をもつて裝飾した、いわゆる紅花緑葉風を摸せるもので、小田原彫は一般に鎌倉彫よりは浅い。明応四年北条長氏、相模の小田原に據つたため、小田原は関東の都会となり、諸工人ここに集つて一種の様式ある器物を作つたので、その土地の名を冠したものである。(大百科事典)

小田原葺 けら葺と同様のものである。(大百科事典)

小田原提燈 箱提燈の形状細く筒状をなせるもので、必要に応じて伸縮自由となし得、豊んで懐中することが出来る。延宝頃の附会の句集「隠蓑」に「おもひの煙ふところ提燈」とよまれたものはこの提燈の進化したものである。もと相州小田原駅の人甚左衛門という者、天文の頃はじめて

透しに長ず。(大辞典)

小田原彫 彫木の器物に漆をもって髹装(きゅうそう)した物の名称。木製の器物に牡丹、梅花、菱、紗綾(さりょう)形、雲形等を彫刻し、その上に黒漆を施し、更に赤漆をもつて裝飾した、いわゆる紅花緑葉風を摸せるもので、小田原彫は一般に鎌倉彫よりは浅い。明応四年北条長氏、相模の小田原に據つたため、小田原は関東の都会となり、諸工人ここに集つて一種の様式ある器物を作つたので、その土地の名を冠したものである。(大百科事典)

小田原葺 けら葺と同様のものである。(大百科事典)

小田原提燈 箱提燈の形状細く筒状をなせるもので、必要に応じて伸縮自由となし得、豊んで懐中することが出来る。延宝頃の附会の句集「隠蓑」に「おもひの煙ふところ提燈」とよまれたものはこの提燈の進化したものである。もと相州小田原駅の人甚左衛門という者、天文の頃はじめて



『新編相模風土記』の川西村の頃に「金山社 本村小名峰ノ鎮守。神体銅鏡径三寸七分ノ内ニ佛体ヲ現ス。村民持」とある。

西相模の石造物(3) 山北町・川西 金山社のご神体

そのご神体を拝することが出来たら、と峰の部落を訪れたことがある。金山社は、鍛冶師や鋳物師それに飾師らが信仰した神で、金山さんと呼ばれ、各地の農山村に分布している。西相模では峰の他に皆瀬川村(山北町)、高尾村(大井町)、酒匂村(小田

原市)に祀られている、と『風土記』に記され、また、鍛冶屋(湯河原町)にも残っている。柳田国男は、金山さんが農山村で祀られたのは、当時、農耕に従事していた村民には、製鉄の技術集団が信奉する金山さんに、特別な霊力があると信じて、その集団が村を去っても、その村の神として祀った、と言う。

ところで、峰の金山社には、『風土記』に記す神体の銅鏡はなく、写真に掲げた像が安置されていた。鋳物製なので厳密には石造物とは言えないが、高さは八センチメートルほど。鋳物の質は雑で、稚拙な作りで古いような感じはするが、年代が記されていないが、残念である。(岡部忠夫)

造るにより名づくといわれる。(大百科事典) 小田原足駄 相模小田原産の一種の足駄。東海道名所記図寛文「小田原足駄、樺の丸木履なり」(大辞典) 小田原様 昔、小田原北条家の臣下達の間に行われた特有の風俗。北条五代記「上下の嬖の矯めよう、衣紋のかきように至るまでも、小田原様(よき)とて、皆人学べり」(大辞典)

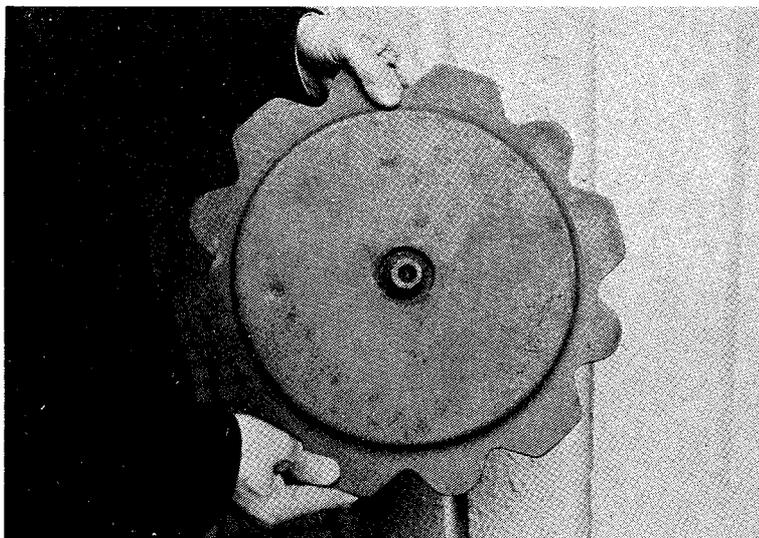
またこのほかに大百科事典には小田原、小田原城、小田原征伐などの項目があり、また別の本には小田原水道、あるいは小田原用水ということばも出てくる。ともかく、こういうふう

天正十八年(一五七〇)北条氏滅亡後はほとんど姿を消してしまっ。徳川家康が江戸に開府すると小田原文化はすべてこれに吸収されたといわれ、わずかに松原神社その他の社寺、いろいろな家ほか数家を残すのみとなった。これを要するに、現代の小田原を考える場合、小田原城、石垣山一夜城その他の史跡を除いてはさほど重要なものはないといつてよいようである。

わが家の秘蔵品 アメリカ軍焼夷弾の蓋

武田敏治

昭和二十年八月十四日の夜半のことです。空襲警報のサイレンが鳴り出してからいくばくもなく、B29の不気味な爆音が、頭の上のしかかるように、重く近づいてきました。今日の爆音は、いつもよ



「お前は隣のおばさんと早く逃げろ」と言いながら一緒にいた父は、焼夷弾の落ちた近所の家の中に飛び込んでいました。そのときでした、「カーン」と金属の破片が道路に二度三度飛びあがったと思うと、私の目の前に歯車の皿型をしたものが突きささりました。子供心に一瞬心臓の止るようなひや汗が背中に流れたことを覚えています。これが写真の金属板です。三十六発の焼夷弾を一つにまとめて落下する途中で分解させる際、弾の覆のふたの役目をしているものだと後にわかったのですが、空気の抵抗があるために、焼夷弾より後から落ちてきて、不運にもこれに当たって命を落した人もあったようです。こんな悪夢のような記念物にもあがらず、しまい込んだ父も三年前に亡くなりましたが、昨年、家の新築の際に取りこわされた押入れの奥から出てきました。

八月十四日 終戦前夜の小田原の空襲は、日本最後のものとなりましたが、いまの若い人達に平和のありがたさと共に、貴重な遺産として残してゆきたいと思

(アメリカヤ店主)

わが家の古き写真

西山銈太郎

現在の御殿場線下曾我駅は、大正十一年五月十五日開業した。その時の「開駅祝賀記念」写真帳十二葉中の一葉がこれで、駅入口より東方曾我山方面を望んだものである、新道の中央の家の左側が現在郵便局になり、この家の道路反対側が横浜銀行、家の真上の森が城前寺である。

当時東海道線だった国府津・松田駅間十kmは、定規をあてた様な直線で、その間に駅は一つもなく、下曾我に信号所があったただけだった。当時の下曾我村を中心とした附近の村々は、この信号所を駅として、一日二〜三回でもよいから汽車を停めて欲しいと望んでいた。然し駅が出来て、東海道線の当時の上り・下りの普通列車が各十余本停ったが、今度は、せめて急行を一本二本停めて呉れたら便利になるがナと欲が出て来た。

大正11年5月15日 下曾我駅開駅



置に関する「約定書」がある。この長谷川氏を指導者としての運動や準備が実って、やっと設置、開駅に至ったものである。家の一軒もない田圃中に駅が出来たので、正面の道路も勿論新設である。当時は国府津・松田間の県道でさえ二間(三・六米)だったのに、これは四間道路で物凄く広く感じた。

村で計画した道路はこれだけだった。我が曾我岸部落では、直距離にすれば三百米位の処を三倍もの遠廻りになってしまふ。これでは困るので部落から駅方向に流れてる芳町川の堤跡に急遽道路を作った。官地が狭い処は二間以上になる様土地の寄附を求め、一部は借地としたが、翌年末に部落で買い取った。近道の利便を得たい同じ目的の仲河原、並びに、多数の生徒が利用する事になる自修学校へ応援を求める等苦心して、開駅に間に合わせた。

会員消息

◎曾我岸の西山銈太郎さん、神奈川県近歩一會会長を勤めているが、このほど全国組織の近歩一會で発行の『近衛歩兵第一聯隊歴史』上・下二冊に「主要兵器諸元表及び写真」を付録とした豪華本を、このほど小田原図書館に寄贈。近衛歩兵

◎曾我岸の西山銈太郎さん、神奈川県近歩一會会長を勤めているが、このほど全国組織の近歩一會で発行の『近衛歩兵第一聯隊歴史』上・下二冊に「主要兵器諸元表及び写真」を付録とした豪華本を、このほど小田原図書館に寄贈。近衛歩兵

あとがき

◎故中野敬次郎先生追悼号に多くの方々から玉稿をお寄せ下され有難うございました。先生の素晴らしい業向」を連載いたします。

◎齋藤圭太郎先生の「板部岡融成出自考」(続稿分)は次号に、また、高田稔先生の力作『小田原の寺小屋』小田原地方庶民教育の動

に關係がなくとも、軍歴のある人には「兵器諸元表及び写真」を眺めるだけでも明治初年以降の小銃の発達史が分り面白い。

積を改めて知る思いですが、つきましては、先生の著作や論文で、まだ一般に広く知られてないものがございますしたら、お知らせ下さい。再録したいと思っております。

特別賛助会員

- | | | | | | | | |
|--------|--------------|------|-----------|-----|-----|------|-----|
| 智恵袋 | 相田酒造 | 店 | 大 | 営 | 不 | 動 | 産 |
| 足柄香粧 | 株式會社 | 海 | 割烹 | お | る | 海 | |
| 紳士服の | アメリカヤ | 宮 | 茶半家 | そ | び | 二 | 宮 |
| 伊勢治書 | 店 | 株式會社 | ちん | ま | ま | う | 本 |
| かまぼ | こ | 島 | 全 | 土 | 岩 | か | ま |
| 株式会社 | 江 | 市場 | 株式會社 | 東 | 華 | 書 | 店 |
| 小田原 | ガ | 入 | 八 | 小 | 堂 | マ | 書 |
| 小田原信用 | 金 | 庫 | 八 | 子 | 井 | マ | 書 |
| 小田原事務 | 機 | 商 | 株 | 武 | 會 | 社 | 報 |
| 鐘紡株式會社 | 小田原 | 工場 | 松 | 坂 | 徳 | 屋 | 店 |
| 力本ボウ | 化粧品 | 鴨宮 | 株式會社 | 美濃屋 | 吉兵衛 | 商店 | |
| 志 | 澤 | | スーパーマーケット | ヤ | オ | サ | |
| 清水甘納 | 豆 | | 山 | 口 | 菓 | 子 | 舗 |
| 正 | 榮 | 堂 | 湯 | 浅 | 池 | 株式會社 | 小田原 |
| 反 | 寿 | 堂 | 又 | ポ | ー | ツ | 工場 |